

## 日本がん疫学研究会

## 学会トピックス「第3回日本疫学会総会」

学会長 柳川 洋  
(自治医科大学公衆衛生学教授)

急速に高齢化が進む中で、脳卒中、がん、心筋梗塞、糖尿病などの成人病、各種難病などの慢性疾患の予防は、今後の保健活動の主軸をなすものであります。これらの疾病の原因究明および予防対策の樹立に果たす疫学の役割は大きく、全国の疫学専門家、臨床家、公衆衛生活動に従事する専門職種の方々が約500名集まりました。

この分野で活躍されている外国の研究者2人に招待講演をお願いしました。第一の招待講演はニュージーランド国オークランド大学医学部地域保健学の Robert Beaglehole教授で、西太平洋地域における心血管疾患の動向から得られた循環器疾患予防への教訓について発表されました。

ニュージーランドやオーストラリアは虚血性心疾患罹患率が著しく高く、日本はその後を追っかけている状態であり、油断していると日本も同じ軌跡をたどる危険性があります。Beaglehole教授は、人口集団全体を対象とした予防こそ、これらの疾患に対する最も優先すべき戦略であり、特にたばこ産業に対する強力なアプローチが必要であるという意見を述べられました。タバコ税の増税を含めた包括的なタバコ防止政策の必要性を強調されました。

第二の招待講演は、米国テキサス大学栄養疫学 Milton Z. Nichaman教授にお願いし、がんの日米比較疫学から得られた教訓として、がん予防対策における食生活改善の重要性を指摘されました。特に脂肪の過剰摂取が大腸がん、乳がん、前立腺がんの発生と密接な関係があることを世界の疫学データを用いて示して下さいました。さらに注目すべき点はβ-カロチン、ビタミンAの摂取が多くの上皮性がん、特に肺がんの発生を抑制する方向に働くことを示したことであります。

たまたま会長が、厚生省の難病疫学調査研究班長として、5年間にわたって研究のお世話をさせていただいたので、本学会でトピックスの一つとして「難病疫学研究の進歩」を取り上げさせていただき、シンポジウム、ポスターセッションを含めて約30題の演題が発表されました。この研究班は難病のサーベイランスおよび疫学要因の解明を目的とした研究課題を取り上げて研究を進めてきました。

例えば、わが国の難病患者数の推移、難病の疫学像の特徴については、主な病因が判明した疾患、(例えばスモンはキノホルム、劇症肝炎は肝炎ウイルス、ピュルガー病は喫煙ですが、)これらの疾患は有病数、死亡数共に着実に減少しています。また、有病数は減少していませんが、死

亡数の減った疾患として、ベーチェット病、全身性エリテマトーデス、潰瘍性大腸炎、再生不良性貧血、重症筋無力症、天疱瘡などがあり、これらの疾患に関しては、新しい治療方法の開発が進められその効果が表れ始めた証拠といえましょう。

難病の発生原因の究明を目的とした研究でも新しい研究成果がでています。例えば大腿骨頭壊死症の発生と飲酒、喫煙、労働量、肥満、肝臓疾患の既往歴などが密接に関連していることが示唆され、特に飲酒についてはアルコール摂取量に比例して発病の危険度が上昇していることが明らかにされました。

注目すべき重要な課題の1つとして、「疾病登録」を取り上げてみます。老人人口の増加により、がん、脳卒中の患者数がますます増加し、これらの疾患に対する地域レベルの組織的な対策が重要な課題になり、「疾病登録」は対策の計画、評価のための基本的な情報を提供します。がん登録に関しては、全国各府県から13題の演題が発表されました。地域がん登録に関しては、「地域がん登録の精度向上とその効果的利用に関する研究班(班長:藤本伊三郎先生)」の長年にわたる推進力により、高い精度のがん登録が多くの府県に普及しつつある様子がうかがえました。1日も早く全都道府県で同じ水準のがん登録が実施されることを願っています。

脳卒中登録に関しては、栃木県農村地域の例を示します。栃木県の南那須地区では、モデル事業として在宅患者支援システムを確立し、適切な保健医療福祉サービスを提供するための脳卒中登録を開始しました。大学が協力してパソコンによるプログラムを開発して、患者の発症から入院、退院、在宅における援助記録を一元化したもので、タイムリーな情報を活用しながら科学的かつ効率的な患者支援を展開するための画期的なシステムとして注目されました。

保健所が中心になり、情報を有効に利用して在宅患者援助活動を展開して行こうというシステムは今後の保健所の在り方にも一石を投ずるものであります。

そのほかに約200題の一般演題がポスターセッションと口演により発表されました。この学会ではポスターセッションに重点がおかれ、要望課題として喫煙、運動、老化、プライマリーケアと疫学、感染症、疫学方法論など幅広い分野の研究成果が発表されました。



### 第3回日本疫学会総会に出席して

去る1月21日、22日の2日間にわたって第3回日本疫学会総会が自治医科大学公衆衛生学柳川洋教授を学会長として宇都宮市で開催された。「身上を生かすも潰すも3代目」とは懇親会で重松逸造先生がおっしゃった言葉だが、参加者数512名、発表演題数193題（内一般演題は185題）という立派な学会で、「身上」は見事に生かされ、「3代続けば末代続く」学会として順調に発展して行きそうな勢いである。

さて肝心の中身だが、招待講演では米国テキサス大学のNichaman教授が「食とがん」というテーマでこれまでの疫学研究のoverviewをしてくださった。食生活ががん予防において最大級の問題であることを再認識できたわけだが、同時に「さて我々が疫学者はこれから何処へ進むべきか？」という疑問が頭をかすめたのは私一人ではなかったのではないだろうか。

一般演題ではがんと関連したものが37題（約20%）で、他の分野と比べて数の上ではやや寂しいものがあったが、内容は密度の濃いものが多かったように思う。疫学的な解析を行なっている20題を研究方法から分類してみると、記述疫学的検討が6題、症例対照研究が6題、コホート研究が2題、横断研究が6題で、記述疫学的な検討は経年的な変化にまで踏み込んだ聴き答えのあるものであったし、症例対照法、コホート法、横断研究のほとんどが方法論的にしっかりとした研究で、討論の多くは結果の解釈に踏み込んだ中身の濃いものであった。また、方法論についてさらに言うならば、対照群の選定から解析法まで疫学方法論に関する幅広い演題が7題あったことも注目できる。

内容では、要望課題として13府県における地域がん登録の概要の発表があり、登録には直接関係していない疫学者も含めて、活発な討論が行なわれたことが注目される。今年のがん疫学研究会は、疫学研究におけるがん情報の有効利用がメインテーマの1つだが、がん情報の中核の一つである地域がん登録を一括して、しかも疫学という視点から討論できた意義は大きい。また、パソコンの利用というテーマで8題の発表があったことも注目してよい現象であろう。がんに関連した疫学研究20題のうち4題は血液、胆汁などの生体資料を分析したいわゆるBio-epidemiologyであり、この分野のますますの発展が期待される。

個別の演題をいくつか紹介すると、横浜市大木原雅子先生らは遺伝子多型と肺癌リスクに関する症例対照研究を行ない、glutathione S-transferaseとcytochrome P450IA1の遺伝子多型によって肺癌リスクが異なることを報告している。このような研究は確立されれば予防に大きな効果が期待でき、研究の発展が望まれる。また、高長明先生らは喫煙者、禁煙者における生野菜、果物の摂取と肺癌リスクの変化に関する研究を、江蘇省腫瘍防治研究所と愛知県がんセンターの共同研究として発表し、摂取頻度の高い人ほどリスクの低下が見られることを報告した。喫煙対策が肺癌予防のファーストチョイスであることは皆が認めるところであるが、既に喫煙をってしまった人の肺癌リスクを如何にして下げるかという研究も同様に推進すべきであり、貴重な報告である。

最後に無料なことだが、このように発展しつつある日本疫学会に気掛りな点の一つだけ述べてこの報告を終わりたい。それは討論が思ったほど活発にならなかったことである。異なる分野の疫学者の集まりだから自分の専門分野以外の発表

には質問しにくいことは理解できるが、それでは疫学者が一堂に集まっている意味がわからなくなってしまう。特に、私も含めて若手の疫学者にはもっと積極的に討論に加わって頂かなければ、折角の学会の発展も長続きはしないと危惧される。「天に向かって唾をする」とはあまり良くない表現だが、お互いにどンドン天に向かって唾をして、落ちてくる前に勉強して立派な疫学者になりましょう！

（国立がんセンター研究所疫学部 山口直人）

### 新任教授としての抱負

昨年12月1日から鹿児島大学医学部公衆衛生学講座を担当する事になりました。その節には九大の広畑富雄先生をはじめ本学会の諸先生に大変お世話になりました。この場をお借りしまして、改めてお礼を申し上げます。

さて、私は札幌医大衛生学の大学院でインフルエンザウイルスの抗原変異の仕事で学位を取得、約2年間同教室で助手として勤務した後、広島（財）放射線影響研究所（放影研）に約10年間勤務させていただきました。御承知の通り放影研は、広島の中心部から約2kmにある比治山の上に建っております。そのせいもあってか、あまり世間の俗事には煩わされず自分の好きな事だけをやったのは、本当に好運な研究生生活であったと思います。10年振りに大学生活に戻ってみると、大学は、自己点検・自己評価の嵐にもまれ、そして、公衆衛生では人口の高齢化の中でこれまでにない新しい保健・医療への取り組みが求められています。正直なところ、急に山から降りてきた仙人か、浦島太郎のような気持ちが致しております。また、これまでは、放影研という日米両政府に支えられた「大企業」に就職していたお陰で研究費の苦労は余りありませんでしたが、これからは、脱サラした個人商店の経営主のようなもので、自分のやりたい仕事をやるには自分で「稼いで」こないといけなくなったのだなあと改めて感じております。そんなわけで、「鹿児島で、これまでのようにがんの疫学をやる展望はあるのであろうか。公衆衛生学であるからには他のローカルな問題に重点を移した方が良いのかな」などとも考えておりました。ご存知のように、鹿児島県は、HTLV感染症、桜島の降灰、水俣病、全国的にも進んでいる人口の高齢化、離島の保健・医療問題と、多彩な問題を抱えております。勿論、これらに関連した悪性腫瘍の問題、特に、ATLなど、世界的にも注目されているテーマもあるわけですが、私としては、「何か自分独自のテーマを見つけて仕事をやりたい。そのためには、これまで、がんの疫学で養ってきたノウハウを他の疾患をテーマにした研究で生かすことを考えることを考えた方が良いかな」とも考えておりました。しかし、最近では、がんに関しましてもATL以外に、肝がん、そして男では全国で2番目に高い食道がんとローカルな問題に限っても多少やれる余地はあるかなと思うようになりました。実際に研究を進めるに当たっては、日本がん疫学研究会の先生にも色々とお世話になろうかとも思いますが、宜しくご指導ご鞭撻の程をお願い申し上げます。

（鹿児島大学公衆衛生学 秋葉澄伯）

## 第16回日本がん疫学研究会のご案内

期日：1993年6月26日（土） 9:30～17:20

会場：昭和大学4号館600号教室

東京都品川区旗の台1-5-8

会長：中村健一（昭和大学医学部衛生学教授）

主題：「がん疫学研究の原点と展開」

参加費：3000円（会員・非会員とも）

## — プログラム —

- 9:30～9:40 会長挨拶  
 9:40～12:00 シンポジウム1  
 「がん疫学情報の収集と活用」  
 座長 渡辺 昌（国立がんセンター研究所）
1. 疫学研究とデータベース：Overview  
 渡辺 昌（国立がんセンター研究所）
  2. 地域がん登録と疫学研究  
 日山與彦（大阪府立成人病センター）
  3. 検診受診者の登録と臨床疫学研究  
 深尾 彰（東北大医・公衆衛生）
  4. 院内診療データベースと臨床疫学研究  
 桜井恒太郎（東大医・中央医療情報部）
  5. 多数データベースの疫学的統合利用  
 山口直人（国立がんセンター研究所）
- 「追加発言」
1. 病理組織標本データの利用  
 福島 徹（神戸大・総合情報処理センター）
  2. 職場におけるがん情報の収集と活用  
 田寺 守（東京証券業健保組合）
- 12:00～13:00 休憩  
 13:00～13:30 総会  
 13:30～14:20 特別講演  
 「わが国における職業がん疫学の歴史と展望」  
 座長 中村健一（昭和大医・衛生）  
 土屋健三郎（前産業医大学長）
- 14:20～14:45 特別報告「ICD-10の解説」  
 座長 箕輪真澄（国立公衆衛生院・疫学）  
 河合誠義（厚生省統計情報部ICD室）
- 14:45～15:00 休憩  
 15:00～17:20 シンポジウム2  
 「がん疫学の将来への展望」  
 座長 青木國雄（愛知県がんセンター）
1. 序論：21世紀のがん予防と疫学  
 青木國雄（愛知県がんセンター）
  2. 民族疫学  
 田島和雄（愛知県がんセンター研究所）
  3. Familial cancer  
 宇都宮讓二（兵庫医大・外科）
  4. Cohort studyの問題点  
 馬淵清彦（放射線影響研究所）
  5. 疫学と倫理  
 稲葉 裕（順天堂大医・衛生）
  6. 新しい研究方法の問題点
    - A. 免疫学的アプローチ  
 中地 敬（埼玉県立がんセンター研究所）
    - B. ホルモンからのアプローチ  
 森 満（久留米大医・公衆衛生）
- 17:40～19:00 懇親会  
 於：大学病院入院棟17階  
 「タワーレストラン昭和」

事務局：昭和大学医学部衛生学教室  
 〒142 東京都品川区旗の台1-5-8  
 TEL:03-3784-8137 FAX:03-3784-8251

日本衛生学会・日本がん疫学研究会  
ワークショップ分子遺伝疫学  
— 実験医学的基礎とがん予防への展望（Ⅱ） —オーガナイザー代表 森本 兼麩  
（大阪大学医学部環境医学教室）

日時：1993年4月8日（木） 午前9時30分～午後0時30分

場所：東京大学山上会館（本郷キャンパス）

参加費：無料

主旨：がん・循環器疾患等の健康破綻の予防並びに老化制御の科学的方法論の樹立は社会医学上の重要な課題である。本ワークショップでは、がん・循環器疾患・痴呆等に対する罹患の遺伝的な高危険集団を同定する分子遺伝学的方法論と共に種々の有害因子負荷による染色体DNAの変異を個人個人のレベルで定量的に評価する手法について現時点での成果を統括し、予防医学理論とその具体的な展開について総合的な議論を行う。

## プログラム

9:30-10:20

## I. 発がん感受性の分子機構

解説・司会：田島和雄

（愛知県がんセンター疫学部長）

(1) RB遺伝子プロモーター領域の解析—その「分子癌疫学」の中での意義

酒井敏行（京都府立医大医学部公衆衛生学）

(2) 肺がんの遺伝的感受性と喫煙

中地 敬（埼玉県立がんセンター疫学部）

10:20-10:40（休憩）

10:40-11:30

## II. 遺伝子損傷における活性酸素の役割

解説・司会：佐藤茂秋

（神戸大学医学部衛生学教授）

(1) 活性酸素によるDNA損傷8ハイドロキシグアニンと発がん

葛西 宏（産業医大産生研職業性腫瘍学）

(2) 化学物質の相互作用による活性酸素生成およびDNA損傷

川西正祐（京大医学部公衆衛生学）

11:30-12:20

## III. 環境要因によるがん関連遺伝子変化

解説・司会：大島 明

（大阪がん予防検診セ調査部長）

(1) 寿命延長効果のあるエネルギー制限により誘発される遺伝子群 —マウス肝をモデルとして—

小泉昭夫（秋田大学医学部衛生学）

(2) 肺がんの発症に関わる遺伝子異常 —分子疫学の指標として—

高橋 隆（愛知県がんセンター研化学療法部）

連絡先：〒565 大阪府吹田市山田丘2-2

大阪大学医学部環境医学 竹下達也

TEL 06-875-7461（直通）, FAX 06-875-7462

交通：都営地下鉄丸ノ内線本郷三丁目駅下車徒歩10分  
（東大本郷キャンパス内）

